

樹木・花にまつわる物語

第4回 ヒナゲシ 虞美人草

河本義宣

今回はケシ科ヒナゲシを取り上げました。学名 *Papaver rhoeas* L. (1753)。Lは学名を創設したリンネ (Carl von Linné) のLです。ヒナゲシはヨーロッパ原産で英語でシャレーポピー、フランス語でコクリコ、イタリアはパパベロなどと呼ばれ親しまれている花です。中国では虞美人草と呼ばれていますが、以下の故事に由来しています。



ヒナゲシ、町田市内にて (2018年4月)

中国は長かった群雄割拠の時代も秦の始皇帝の出現で統一国家になりましたが、不老不死を願った始皇帝もついに仙薬を得ることが出来ず他界します。仙薬と言われた薬の中毒で死んだともいわれています。始皇帝の死後、秦の厳しい法律に苦しめられた人たちが各地で反乱を起こします。陳勝・呉広で始まった反秦運動(造反)も秦の都(漢陽)のある漢中を目指します。その代表選手が漢の劉邦であり、楚の項羽でした。

当時、劉邦の軍勢10万に対し、項羽は40万でこれまでの武功も圧倒的に項羽が勝っていました。そんな力関係の中で、楚王義帝の「先に漢中を定めたものをそこの王とする」という約束事がありましたが、漢中への一番乗りを果たした劉邦は秦の子嬰の降伏を受け入れ、宮殿の庫は封印し、後宮三千の美女には手を付けず、項羽の到着を待ちます。劉邦は他意のないことを伝えるために項羽が陣した鴻門に出向きます。これが有名な「鴻門の会」です。

「鴻門の会」の詳しい出来事は別の機会に譲るとして、この会を機に二人は対立関係になります。いわゆる「楚漢戦争」の始まりです。最初は項羽が圧

倒的な優勢でしたが、劉邦には優秀は参謀や武將が付くようになり、一方の項羽軍は項羽の独断、専横に嫌気がさし、優秀な武將が一人去り、二人去って劉邦軍に加担するようになりました。形勢は逆転し、項羽は垓下まで追われました。

野営していると敵陣から項羽の祖国楚の歌が聞こえてきます。我が下にいる筈の楚人が敵陣に満ち満ちていることを知ります。劉邦が項羽に聞こえるように楚歌を歌わせたともいわれ

ています。四字熟語「四面楚歌」はこの故事に依っています。我が命運もこれまでと知った項羽は高らかに歌います。

力拔山兮 氣蓋世(力は山を抜き 氣は世を蓋う)

時不利兮 騅不逝(時利あらず 騅逝かず)

騅不逝兮 可奈何(騅逝かざるを 奈何すべき)

虞兮虞兮 奈若何(虞や虞や 汝を奈何せん)

戦場にあってもいつも同道していた愛妃虞美人はこれに和して舞い、また、返歌します。

漢兵已略地(漢兵すでに地を略し) 四方楚歌声

(四方楚の歌声す) 大王意氣尽(大王意氣を尽く)

賤妾何聊生(賤妾何ぞ生をやすんぜん)

と歌いました。虞美人が歌い終わると項羽は愛馬、騅に乗り、手勢八百余人とともに出撃し、それを見届けた虞美人はこの地で自害しました。紀元前202年のことです。後世、ここにきれいな花が咲きました。土地の人たちは往時の虞美人を偲んで、この美しい花を虞美人草と呼ぶようになりました。

■引用：(1)陳舜臣著、中国五千年(上)、講談社文庫 1989.

(2) Wikipedia